

書 道 部 会

講演 「風趣を楽しむ」－自由な鑑賞とこれからの書表現－

実技研修 「米芈の書法」

京都橘大学文学部日本語日本文学科 教授

尾 西 正 成 1

部 会 の 動 き 5

研 究 テ ー マ 6

紀要編集委員 西 沢 琴 音（青森県立青森西高等学校）

前 田 駿（青森県立野辺地高等学校）

書道部会

講演

【風趣を楽しむ－自由な鑑賞とこれからの書表現－】

京都橘大学 教授 尾 西 正 成 先生

はじめに

風趣という言葉キーワードに、私が好きな作品を紹介しながらこれからの書表現及び鑑賞について話をしていきたい。米芾の「珊瑚帖」という作品があるが、この書作品を美しいと思うかどうか、まず皆さんに考えて欲しい。

美的感受性とは

「美しい花が咲いている。」という言葉をよく耳にする。しかし、そこにある事実は花が咲いているということだけである。正しくは、「花が咲いている。美しいと思う。」という形になり、美しいと思うかどうかは花を見た者の主観に大きく左右される。そして現実を鑑賞し、自身の中に「美」を生み出しながらその「美」を主観で味わうことこそが「美的感受性」と呼べるものである。当然、他人の中に美が生まれたかどうかは当の本人にしかわからないが、だからこそ生まれた美に対する感動を、表情や言葉などで伝え合って共感することは素晴らしいことである。また、個々の先天的なものや、環境・経験の有無によってそれぞれ異なり、例えば同じ花を見てもその感じ方が異なるのは、「個性」「人間らしさ」「自分の発見」と言える。

書の魅力とは一体何なのか。迫力のある線が魅力的なのか、味わいのある線が魅力的なのか。形にしても古典的なものがあるのか、読みやすいものが魅力的なのか。そもそも書は見るものなのか、読むものなのか。様々な観点があるが、「鑑賞」というテーマをもとに考えていきたい。

古典について

古典とは、古いから古典と言うのではなく、常にそれぞれの時代に合った新鮮な評価基準の中で純粹に選ばれ、残されてきたものである。つまり、古来からその時代の好みに合った水準の高い書であり、次世代の趣向にも耐えうる書であった。その連続の結果が古典と言われる作品である。古典作品とは、過去の優秀な遺物ではなく現代に生きるモダンでポップなものであると考える。

蘭亭序も多種あるが、どれが好みか。直線的で、墨の抜けがあるのが味わい深い張金界奴本か、もしくは力強さも感じられる定武本がいいのか、読みやすく、学びやすい神龍半印本が一番優れているのか、意見が分かれるところである。また、淳化閣帖を見て王澤や傅山が書いた作品があるが、行書のように書かれてあるところを草書のように書いている。これは、古典から離れて自由に書いたと捉えるか、あえて同じように書かなかったのか。そっくりに書きつつも、その中に自分の中の書道に対する価値観や技術と相まって、古典を昇華したことによって出来上がった作品なのか。その辺りの考察も自由にしていって考えている。

美の在処

「書を味わう」とは様々な見方をもって、個人的主観的な鑑賞眼をもって自由に行われるものであり、書き手と同様に鑑賞者も「自由」を持つ。つまり、作者と鑑賞者、そして作品が存在して初めて芸術作品として成立するものであると考えている。では、「自由な見方」とはどうあるべきか。読めるか否か、上手いかどうか、綺麗か否か、作者が誰か、など様々な要素は鑑賞者の中に一種の「美」が生まれたかどうかである。全ては自身の中に存在するものであり、まさに「好み」に集約されるのである。ただし、個性を大切にすること、ある意味では私たちの芸術理解の幅を狭めていることもあることも忘れてはいけない。教養や知識を得ることにより、芸術を味わう感性は広がりその機会も増えるが、個性的に作り上げられる自己的な尺度によって範囲を限定的なものにしてしまう可能性もある。そのような事実があるということを知り、警戒しておくことも重要である。

美術作品から見た鑑賞

ルネサンスの最盛期はキリスト教をはじめとして何らかの思想が影響している。当時の絵とはキリスト教を伝道するための一つの手段であり、絵描きは歴史画を描く役割が強かった。静物画や風景画などは歴史画を描くための基本となるべき扱いである。しかしそんな中で、ミレーが風景画を描いたことは議論の対象となったが、それをきっかけにヨーロッパ

の絵画の概念が大きく変化していく。同じ風景を見ても感じ方が変わると見方も変化するという事に気づいたモネの「印象日の出」の作品や、作家の思うがままにモチーフを変えたセザンヌの作品、非現実的な描写から見る者に鑑賞を委ねるスタイルのルネ・マグリットも有名である。マルセルデュシャンの「泉」などは、見る者が芸術と判断したら芸術作品となる象徴的な作品。カンディンスキーはモネの作品を見て美しいと感じたが、何が書いてあるのかわからなかった。また、反対に置かれた絵を見て美しいと感じた経験から、何が書いてあるかは関係なく美しさを感じるということに気づき、抽象派の絵を描くようになったという。

書作品から見る鑑賞

慈雲の「閑吟」という作品は素人にはなかなか字を読むことはできないかもしれない。読めることが書として大切なかどうか。線が太すぎてよい作品と思えないのであれば良寛の字はどうか。他にも、にじみなどの墨の特徴を前面に押し出した作品などもあるが、文字ではなく絵が描かれており、果たしてそれは書の作品と言えるのか。何を重視して何を美しいと判断するかはやはり見る人によって異なってくる。

大切に考えていること

重要視していることは、文字を使っている利点を存分に発揮しているものや、自然な趣がある書。高村光太郎氏の言葉を借りるなら「無理と無駄のない書」である。また、岡倉天心氏の『茶の本』より、「真の美というものは、不完全なものを前にしてそれを心の中で完全なものに仕上げようとする精神の働きにこそ見いだせる」ということである。場面によって服装を変えたり、小物で個性を見せたりすることと同じように、日常にある個々のセンスを書の作品に落とし込めることができればいいのではないだろうか。各自それぞれが様々な感性を持っている。それらをお互いに認め合ってそれぞれ磨いていくことが大切である。年齢やキャリアに関係なく、自分の今の感性を得意の書に結びつけることができれば、楽しみも増すのではないだろうか。

実技研修

【米芾の書法】

京都橘大学 教授 尾 西 正 成 先生

米芾の作品資料について、字形や構成、筆遣いの説明を聞き、資料の中で気に入った作品を各自で選び、半紙に書く。また、書いた作品について先生に批評し、添削していただいた。

○米芾について

宋の四大家の一人で、米顛とも呼ばれる。「蜀素帖」などが有名で、前半はリズムよく宋時代の好みに合った蘭亭序のような雰囲気がある。後半では軽快に筆が扱われているのに対して、前半はじっくりと慎重に書かれているのが特徴である。同年代に書かれた「苕溪詩卷」は書かれている素材に違いがあるためか、ゆったりとして自由な雰囲気があり、こちらの作品も有名である。王羲之を踏襲した書風から平淡天真の境地へと抜けていくのが晩年の米芾の特徴である。

○中秋帖と張李明帖の比較

「張李明帖」の「氣力復何如也」の部分と「中秋帖」の「中秋不復不得」の箇所は運筆が似通っている。「中秋帖」が米芾の臨書であるという説もあるが、何よりも自然な筆運びができていて箇所に注目したい。あからさまではなく、鑑賞する者がそれとなく中秋帖を感じられるような自然さが素晴らしい。

○連綿による表現の幅

王羲之誕生以前の時代の書では、文字は一字で完結していたが、王羲之書法が確立した米芾の頃には、次の文字へと縦への文字の繋がりが生まれ行と行との深い関係が強くなってきたことにより、書の新しい表現・表情の幅が広がった。王羲之の筆運び、字形の癖がまさに行書及び草書の書法ともいえるだろう。そのように考えると、書を学ぶ上で王羲之はやはり欠かせない存在である。

○珊瑚帖と値雨帖の揮毫

細部に拘わらず、気楽に書いているような自然な筆運びを意識するのがよい。

○資料

- | | | | |
|--------|-------|--------------|-------|
| 1 張季明帖 | 2 中秋帖 | 3 中秋帖と張季明帖比較 | 4 珊瑚帖 |
| 5 珊瑚拡大 | 6 尺牘 | 7 値雨帖 | |

質疑応答

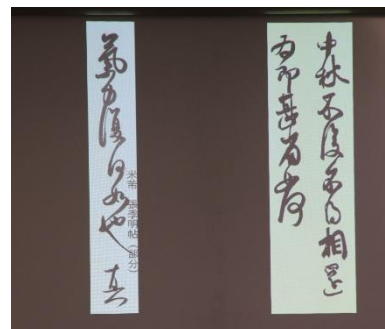
感想・質問

シンプルでいかに自然であるように見せることができるのかが大切だと感じられた。太い筆で荒々しい動きもありつつ、ふわりとした線もあり、相反する要素が組み合わさっており、シンプルに見えつつ、複雑さがあるのが書の魅力だと感じた。正しい鑑賞、誤った鑑賞という概念では無く、いかに生徒に深い鑑賞を促すことができるかが課題だと感じている。普段高校生に対して授業をしている教員に向けて、高校生に伝えて欲しいことがあれば伺いたい。

回答

昔のポケモンカードが信じられないくらいの価値がついていたりする。芸術や物の価値に決まりは無く、書道は自由にやっているようで、こうでなければいけないという固定概念に縛られているかもしれない。普段の生活で発揮している個性や感性を書で表現することができれば、より書道を楽しめるのではないかな。ものの見方は人それぞれである。

大会の様子（写真）



部 会 の 動 き

令和4年5月26日	第1回役員会	青森県総合社会教育センター
令和4年8月17日	第2回役員会	青森県総合社会教育センター
令和4年8月18日	青森県書写書道教育研究会・高教研書道部会研究大会（合同大会）	青森県総合社会教育センター
	(1) 書写研総会	
	・令和3年度事業報告	
	・令和3年度会計監査報告	
	・令和3年度収支決算報告	
	・令和4年度役員改選	
	・令和4年度事業計画	
	・令和4年度予算案	
	・心聲會展について	
	・令和5年度研究大会について	
	期 日： 集約日に開催	
	会 場： 青森市	
	講 師： 文科省調査官	
	研究発表者： 今井 礼子	
	(2) 高教研総会	
	・令和3年度事業報告	
	・令和3年度会計監査報告	
	・令和3年度収支決算報告	
	・令和4年度役員改選	
	・令和4年度事業計画	
	・令和4年度予算案	
	・心聲會展について	
	・令和5年度研究大会について	
	期 日： 集約日に開催	
	会 場： 青森市	
	講 師： 初等中等教育局教育課程課教科調査官	
	研究発表者： 前田 駿	
	(3) 講 演	
	「風趣を楽しむ—自由な鑑賞とこれからの書表現—」	
	京都橘大学 教授 尾 西 正 成 先生	
	(4) 実 技	
	「米芾の書法」	
	京都橘大学 教授 尾 西 正 成 先生	
令和5年1月6日	第3回役員会	東奥日報新聞ビルNew's ホール
令和5年1月7日～8日	第46回心聲會展	東奥日報新聞ビルNew's ホール